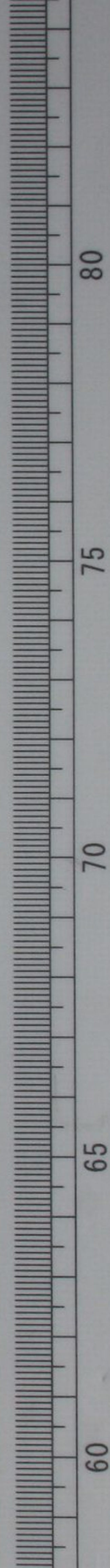


中村俊定文庫
文庫 18
244



場山紀作

(之文四)

之寸寸之九

(之之五)

相模川

(之之四)



湯山紀行

山櫻ハ散り過ぬ水と藤つゝし咲つけを春
 色をそこなはすいてや相模なる芦荊の湯に浴
 みせんとそゝろに旅心つきて弥生の廿日あま
 り筵よ杖よとひしめきて立出るに荒井崎と大
 森との間にて夜ハほりく明たり
 手を引かぬはかりや雲に鳴く雲雀
 馬光
 首途のいはひ事してゆく
 川崎の醫王寺にかけよる



山	卯	酒	な	箱	ハ	し	山
ま	の	匂	り	根		は	う
て	花	の	て	の		し	と
も	に	能	か	山		も	の
聲	見	士	え	風		過	香
や	せ	た	て	な		さ	も
か	て	れ	も	を		る	捨
ら	や	か	我	寒		に	ら
し	山	れ	我	あ		例	れ
て	の	も	旅	け		の	ぬ
初	香	我	亭	れ		な	宿
川	景	旅	を	と		や	り
を	色	訪	訪	哉		い	哉
		ひ	ひ			晴	
白	千			は		く	
流	瓜			か		と	
				り		覺	
				の		け	
				裕		れ	
				に			

の	な	是	か	と	酒	大	母
人	る	へ	家	か	匂	磯	貝
の	亭	来	に	く	ぬ	道	さ
あ	主	り	草	し	け	六	し
り	な	玉	鞋	て	参	七	し
け	り	ふ	を	三	の	つ	し
る	け	な	と	日	川	は	し
よ	れ	と		の	越	か	し
と	ハ	語	去	旅	し	り	し
お	か	し	々	行	の	る	し
も	ゝ	て	年	恙	勝	童	し
ふ	る	よ	の	も	の	の	し
に	山	ろ	夏	な	蝶		し
つ	住	つ	ハ	く			し
け	に	に	松	紀			し
て	も	ま	籟	伊			し
	か	め	主	国			し
	う	や	人	屋			し
	や	か	も	洞			し
	う	か		雲			し

(大東京文具チエーン社製)

芦の場をたふそここゝと場廻りそ水より小田	楊梅の取残す水やはこね山百木	リて	阿波の徳百木も同じ場にありしか跡にとゝま	立跡ハ淋し卯月の雨の音	人影も早く消るや谷若葉	谷越し可 <small>た</small> やかてとほかり時鳥	見送りて帰水は菴にかんこ鳥	帰らんとする日所の人々より餞別	よしきりや噂に夜を涼し
				双鳥	栄之	洞栗	満潮		三島 南菴

涼しさを告よ燕の行もとり	山踏にも咲やも里ハ牡丹時	湯けふりをさくや箱根の杜鵑	浴衣にも膚たゆまし青嵐	洗ふたる耳にハさそ赤時鳥	見あくるやそこに若葉の山まこる	沿津より文通に聞へたる句	灌佛やわけ乙朝湯のありかたす	法 <small>り</small> なうぬ身もけふの尊とさは忘れかねて	箱根路に夏こそ来れ苔の花
歩鶴	敬滴	蒼山	野笛	初紅	石矢	三島		弄珠	

(大東京文具チエーン特製)

森戸明神	無双の美景 画工も及ひかたし	鹿の子も山あふかたや夏花摘	光明寺	鶴岡八幡宮参詣すの道すかろ	差葉までみな珠珞の御山哉	丈六尺とかや	よりの因みありけは尊像を拝するに御長光	鎌倉の長名寺に一夜を明す慈眼院の住僧もと	今しはうくととゝめう水しとふりすこゝ
------	-------------------	---------------	-----	---------------	--------------	--------	---------------------	----------------------	--------------------

麦の穂もまねきつるゝや暇乞	聴雨	さしなくて風雅一なる牡丹哉	沽古	一もとや水を染たるかきつはた	蚊松	卯の花もおもしろ雪や慰み湯	麦十	時存小や優曇華の露なめる蠅	如凡	竹叢を待もうけたり時鳥	白汀	卯の花に月もそへてや亭主ふり	挨拶	原の熊澤氏の許にとゝまろ
---------------	----	---------------	----	----------------	----	---------------	----	---------------	----	-------------	----	----------------	----	--------------

(大東京文具社エー・ン特製)

岩波にかゝるや海松も御注連縄

三ウ

是より宿のさきしゝ茅舎に帰りて

竹の子やるまの垣根も破れぬす

わっかの区田ながらしはしの官袴を

脱て湯の山に遊ぶの日数は八午とせ

にかふる栗しやなぐんをせふの帰郷

はかの浦島が箱根もとりとやいはん

と戯れて贈る

見ゆかへ来たつ牛の子共達

麦阿

元文四己未年卯月日

十四才

(大東京文具チェーン製)

後の月、夜酔のぬしに招かれ
二十里に杖を曳て、姥島の
一句を設け、それより中郡
の人々に迎ふれ、そこの凡窓
に胡座して、芙蓉峰の雪
の花を悦び、夏の苗別に、金目川
の踏の麓を、重たし、まどくる
しみあるは晴成の曇りて、日敷
もや、つるに祖の祥忌も、白

よれハ歸路におしむか人す
 又海危名の江瓜芥の雨士より
 飛脚来つて各連中待伏
 するよし聞ゆ彼深八か勇氣
 を今に傳へて松籟老師に
 志をばこふ事無二無三なれハ
 同門の信うしおふへきにあらす
 と旅瘦の膝栗毛に相模川の
 早瀬をわたつて矢残瓜亭を
 尋侍る

(大東京文具チエーン特製)

風や弦をはつして竹の蕩

鳥酔

門ハこゝよと鷓鴣飛ぶ

残瓜

七十二候あり

略す

雨芥亭

矢原風に勝手もゆりし蕪汁

青奴

火燵ひとつにふせく夜嵐

雨芥

源氏行あり

畧す

短哥行

残瓜亭

鳥酔

布杭に跡引はへて時雨哉

昼のうちから夕千鳥啼

献立ハ旦那の智慧を反故して

また初物を茵取の芭

明残る月を盞に汲ニばし

所も六條からハ朝かほ

十徳の供ハ調市のうそ寒き

一釣瓶こハ足りぬ泥足

青物の肴にハ猫もあちう向

母のはなしのちいと差合

梅仙

残瓜

雨芹

五烟

徳雪

レニオ

西塘

蒼鳩

妻仙

五烟

上かけハとれとも花の霽節供

蛙ハ啼けと降る空てあハ

かくまひ言つたけえ花産の花ハ

なげふと海老名の泉の大根引

えんちんと百明法師を青奴士

えいなかすせも艶茶瓶の物

すすし あもつ たく立ある連中

斗追々はせ来りぬ

探題 大根引

山伏

雨芹

残瓜

其杖の金剛力や大根引

鳥酔

嫁も袖引かれに出たり大根畑

残瓜

婆々

関寺の手たすかりなり大根引

西塘

道心

其時も西に向ふ中大根引

蒼鳩

馬子

引て来ていさや大根の罌盃

五烟

若衆

三才

(大東家文具子エーニ製)

大津絵の若衆の顔や大根引

穂雪

浪人

尾葉のまた枯れぬうち大根引

梅仙

菰僧

御無用といふに助るや大根引

雨片

座頭

原中に音さかしや大根引

鷺泊

強直

我背戸^里高間が桑や大根引

青奴

紅輪雨降山に蒸へ茅屋に戻りぬ

さらハ残瓜亭の短歌をこゝに

ハあんと文墨を取出

ニ折 雨芥亭

遊ハさへ春に 午^干を継足して

あき水^ニ物もいけぬ 鬼王

紙子^ヲも校^スらや^キぬ 俄川

十八日の泊瀬の^トろ

只飛んて走行^ニも 初鳥

今の午鍋をくやむ 御所下り

湖を脊戸^マてはこふ 春の月

西塘

雨芥

西塘

徳雪

梅仙

蒼塙

残瓜

五畑

西塘

(大東京文具子エーニ特製)

暑も の寺ハ残^ル可

散入におく底もあき 喰せあり

笑ハ相^手に 婆^ノも 雇^ハれ

あ^ハニ^ハと 摘菜^ヲた^ラけ^ノ花^ノ道

日を長^クと 継子^ノ尾^ニひく

饒別

木の葉^マて 跡^ヲ追^ハたり 山^ノ嵐

来^リ日^ニは 蒼^ナり^シか 歸^ル花

足跡^ハ名^ヲ残^シさ^ヤ橋^ノ霜

西塘

蒼塙

徳雪

青奴

鷺泊

雨芥

梅仙

西塘

沖のくも寒や積こ雪の船

千瓜

白魚をさらしぬいたり雪解川

東鳩

風の靡きたてりや星月夜

亭水

一筋の糸引少すや麻の聲

時来

色くの鳥を相争に柳のふ

柿紅

川風の起しこ行や合歡の花

引雨

花の香やほと踊る更衣

翅白

春雨や夏の青みを濯出し

午花

夕立の曲尺や遠かて陽海の上

沙鏡

降る雪をさしけ添たり星の木暮

冬松

焚れこ紅葉も白し塩けふり

魚芝

明行や舟に螢のちり別れ

芥風

夕鳥や入日のちとを追かて咲

老鴉

鳥も森にこもりて十夜哉

三峽

霜の花の榎木にちりや雪念仏

雙鯉

木も欲にはたれこ

才林

藪入や二月の雪雪の綿ほうし

琴吹

猿の尻かけたる跡や岩つし

白之

昔や時の来りまじ咲こ辰の

秋陽

ぬじこあざ足智恵つくや秋の色

玉芳

延左かす糸を連て松野哉

宗瑞

諸国文通

関守の映又警く午鳥かな

騎西

夕涼

柳摘み葉をとく水こや啼雲有

鴻葉

如白

箱毒の見捨て行やか、足山

女

花仙

月やまた習ひ去の虫もあ

文

錦川

陽炎をよこすや市の馬ほこり

吉之

巨山

散り降ハ糸の切水こや蓮の花

柳

夜砧

月今宵琴の囁あり庭の松

柳

春舟

尊さハ門から外も紅葉かな

思行白

南嶺

空世からもろもろ来たる瓢哉

斗碎

三斛庵主の行脚と聞て

為守せらるる老鴉子へ申送る

浦山し留守飛相年のみえさ、あ

千后

初原の馳走や箱の荊こほし

能者

戸井

涼風と夏に細し水の音

大宛

東海

木つゝオの柏子にちるす紅葉哉

守中

瓦在

樹こ置く十二一重や松に葛

坂越

栞高

啼席を淋しかるせる鉦鼓哉

白橋

不礙

乙鳥子言傳せぬかわたり鳥

竹鶏

元文五年 庚申 初冬日

いろ／＼の花を釣出す柳哉

杜菱

梅が香や是れ遠くて近物

希因

子を寐せて出るや信田極女望

公粥

麦畑やされと過る月は見ず

輕子

一年の中かゝ寂し秋の聲

百溪

川蟬も殺生やめで蓮の花

半栴

里の秋うらやみ顔や春の鹿

碎紅

蜻蛉も磨へうしたり後の月

野笛

涼しさをみり仰むくや春の松

矢舟

(大東京文具子エーニ特製)

俳諧

相模川

青奴選

半紙

兼て我が名の事と老師にうかゞひてと
 三解庵主人へ申送りよ雨降山もふての
 みやげとて青奴の二字をもて末れりげ
 よろこひわすれましととりあへす一章
 を記ふに両氏もそにおり合て三ツ物
 とはちりぬかつかれは庵主に出あひかの

俳諧を聞てさうに蕉門の尊さかの信を

こらしてをのく其門門風と訊ふの一

句つゝ亦小これらのよろこぶも我々が

いらさ小と後へにしるし侍りのみ

取替へた望よ一際暮山子哉 青奴

野守も草の花に羞やく 杏雨

御祈のりも二人な月見も戴いて 逢鳥

もとよりしたしき道の友なれはりさゝか名改と

かす

置和に暮くたのもしし 水夢烟 宗瑞

(大東京文具デパート特選)

はぬしふ凡をそこの途中にすゝめて

其淋しみにあそいむと思ふな小は

道よ今霜のさ木橋かけ返し 鳥酔

鳥酔坊大山詣のせとりかけに暮る日の

青奴をばひ酒のみとより例の修草の地を

清しに院に帰るとする其あたるの復す

あををさきし侍る

相傘よ添へちかうせよ 初時雨 青阿

元文四己未亥日

